

わたしたちはスーパー・ディームへと変容する

緑川雄太郎

(2022)

2020年5月5日、心穏やかではいられないニュースがBBCによって報じられた。同年3月11日のWHOによる発表(「Covid-19はパンデミックとして特徴づけることができる」)から間もない非常事態下だったこともあって、ともすれば一般的にはあまり注目されていないかもしれない。その見出しはこうだ。「2070年までに30億以上の人々が極端に暑い場所に住むことになりかねない」[1]。この過酷な(かつ不可避な?)近未来は2070年に突如として訪れるわけではない。周知の通り変動はすでに起こっており、今後さらに加速することが予想される。

今住んでいる場所が暑すぎて住めなくなれば、人は暑すぎない場所へと移動する。気候変動による人類の大移動は、社会に大きな影響を与え、多くのシステムはアップデートを迫られる。しかしながらわたしたちはまだ、想像を絶するその現実に対する準備が全くできていないと言って決して誇張ではない。どこかに移動して安住できる場所を確保できればまだいいが、地球自体が生命にとって今以上に危機的な環境に変容した場合、他の種もそうであったように人類もまた絶滅する可能性に関して完全否定できる者は少数派だ。

人類が絶滅について振り返るとき、わたしたちはそれを「ビッグ・ファイブ」と呼ぶ(大規模な絶滅はカンブリア紀以降5回生じている)。問題は、やがて来る「第六の絶滅」だ。未来の知性は絶滅の歴史を「ビッグ・シックス」と呼んで振り返るだろう。かれらは人類をどのようにみなすだろうか。考古学者が恐竜の骨を発掘しその生態系を研究するように、かれらはわたしたちの骨だけでなくプラスチックやコンクリート、放射性物質を収集し、過去から学ぶべき重要な教訓を演繹するのだろうか。限定スニーカーや全自動洗濯機、「情報でいっぱいスマート」フォンといった現生人類にとって重要なものの多くは、かれらにとっては用途不明のオーパーツかもしれない。わたしたち人類は、次世代(生物学的な意味で異種のかれら)にとって意味を持つ何かを託すことはできるだろうか。残された時間はどうやらさほど長くはなさそうだ。フリードリヒ・ニーチェに倣えばニヒリズムは今世紀中まで続くだろう。今日の子供たちは孫の顔を見れないかもしれない。

以上のようなアポリア(ドゥーム・スクローリングのようなメンタリティ)に陥ることを避けるために、ここからはアートと哲学を経由して、もうひとつの現実へと繋がるドアを模索する。

ボリス・グロイスはアートを「第二の身体」[2]と呼ぶ。第一の身体としてのアーティストがたとえ死んだとしても、その作品が「第二の身体」として残るからだ。この「第二の身体としてのアート」を敷衍し、アーティストを人類として考えれば、人類以降もアートは存続する。わたしたちはそれを「人類以降のアート ART AFTER HUMAN」と呼ぶことができるだろう。「人類以降のアート ART AFTER HUMAN」は文字通り、人類のためだけのアートではない。人類の次に続く種に向けたアートでもある。

哲学を「絶滅の道具(オルガノン)」とみなすレイ・ブラシエは、「絶滅の『その後』はあり得ない」[3]と言う。ブラシエのこの絶滅前後の間にある断絶は、グロイスの思考基盤、つまり、人間中心主義と強く結びついているとも言える。しかしながら、例えば、生物学的な意味での種としてアートを考えた場合、より長く存続するアートを「第一の身体」、一時的な人類を「第二の身体」と見なすことは可能だ。同じように、仮に人類が絶滅したとしても後続種にまで存続する何かがあれば、「その後」はあり得る。個体の集合としての種が絶滅すれば「その後」はないという視点は、このようにスライド出来るかもしれない。

まず、種をひとつの個体とみなし、「超個体 Super Individual」として捉え直す。次に、アートを人工遺伝

子として考える(言わずもがな生物学的な意味での遺伝は不可能だが)。そして、その「超個体(ヒューマン)」は次の「超個体(ポスト・ヒューマン)」のために人工遺伝子としてのアートを残す。これにより、かつては別種であったわたしたちとかれらの間には何らかの遺伝が行われ、特殊な種として結びつくことになる。集団遺伝学におけるデームという用語を援用すれば、この特殊な遺伝集合を「スーパーデーム」と呼ぶことができるだろうか。つまり、かつては遺伝子流動が生じなかった種同士が、人工遺伝子としてのアートによってその断絶をブリッジし、同じスーパーデームとして知を継承する。言うまでもなくこれは仮説に過ぎないが、オプティミスティックすぎるかどうかはまだわからない。沈黙の人工遺伝子はカプセルの中でただその発動のときを待つ。それはいつなのだろう。「ノヴァセン(ジェイムス・ラブロック)」？そこにいるかれらは何なのだろう。「ホモ・デウス(ユヴァル・ノア・ハラリ)」？「LIFE 3.0(マックス・テグマーク)」？人類と隔絶されたMOCAFの地下世界は今後、どのような世界と遭遇するのだろうか。

[1] <https://www.bbc.com/news/science-environment-52543589>

[2] <https://www.e-flux.com/journal/82/127763/art-technology-and-humanism/>

[3] Brassier, Ray. *Nihil Unbound: Enlightenment and Extinction* (p. 230). Palgrave Macmillan.